

特別企画

国際系学部の展開図

龍谷大学 国際学部 グローバルスタディーズ学科

海外大学進学と同等の学習量により 英語力とタフネスを身に付ける

2015年度に国際文化学部を国際学部に改組して、グローバルスタディーズ学科を新設、実践的な英語力とリーダーシップを備えた人材育成をめざす龍谷大学。その具体的な教育内容、人材育成の方法を久松英二学部長に解説してもらう。

学部沿革・人材育成の方針

海外で活躍する リーダー型の人材を育成

龍谷大学国際学部は、滋賀県・瀬田キャンパスにあった国際文化学部（1996年設置）を2015年4月に京都府・深草キャンパスに移転し、1学科体制から2学科体制（国際文化学科、グローバルスタディーズ学科）に改組した。

社会のグローバル化、価値観や生き方の多様化が進む中で、異文化を受け入れ、多文化共生社会の実現を担う人材が一層求められるようになってい

る。学部改組はこうした社会の要請に応えるものだ。

国際文化学科は、国際文化学部の教育内容を発展させ、「国内において異文化間に生じる課題解決に貢献できるファシリテーター」の育成をめざしている。これに対して、新設のグローバルスタディーズ学科が育成をめざすのは、「海外で活躍し、地球規模の問題を解決できるようなリーダーシップを備えた人材」だ。

めざす人材像はそれぞれ異なるが、学生に備えてほしい資質は共通している。本学部はグローバル人材を「世界のどの場所においても社会とつなが

り、しっかりと生きていける人間」と捉えている。そのため国際学部の学生には、単に英語が話せるビジネスパーソンを志向するだけでなく、柔軟性とタフネス、揺るぎない倫理観を身に付けさせたいと考えている。今回は新設のグローバルスタディーズ学科について詳説する。

教育内容

学習習慣を徹底し 留学に耐えうる力を養う

グローバルスタディーズ学科は「日本で一番勉強する学科」をめざしてい

【学部基本情報】

- 設置年度：2015年度
- 学科編成（入学定員）
 - ・グローバルスタディーズ学科（120人）
 - ・国際文化学科（330人）
- 専任教員数（海外出身教員数）
 - 教授：26人（11人）、准教授：7人（1人）
 - 講師：6人（2人）
- 留学
 - グローバルスタディーズ学科は1セメスター以上の長期留学必修



国際学部長
久松 英二

ひさまつ・えいじ ● 1982年南山大学文学部神学科卒業。1985年同大学大学院文学研究科神学専攻博士前期課程修了。1993年ウィーン大学大学院神学専攻博士課程修了（神学博士）。2010年、龍谷大学国際文化学部教授。2015年から現職。

る。これを実現するために学生は入学後の半年間で勉強する習慣を徹底してつけていく。そのため、本学科では授業の課題を含め海外の大学と同等の学修量を課している。これにより学習習慣に加えて、タフネスも身に付けることになる。学生からは、「課題を書くために英語の文献を読むことが多く、それだけで夜までかかることもある。勉強量が多いと聞いていたが、想像以上に大変だ」という声も聞かれるほどだ。しかし、多くの学生は「学ばなくてはいけない環境があるから、知らないうちに力が付いていた」と自身の成長を実感している。

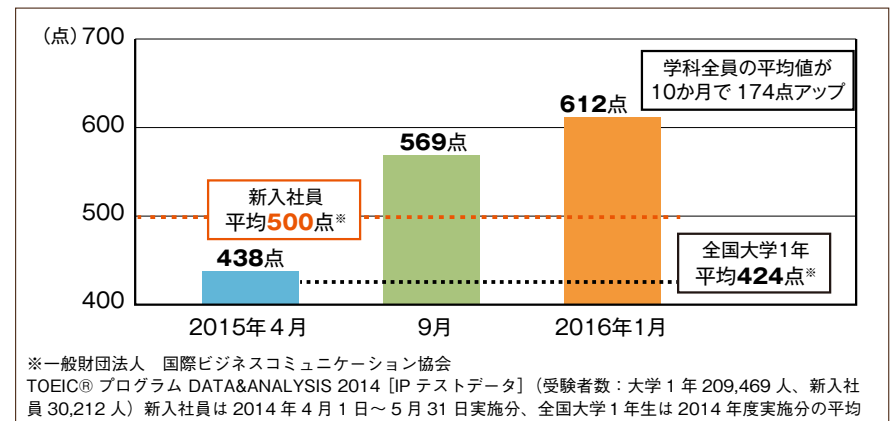
本学科のカリキュラムは、2年次以降に1セメスター以上の海外留学を必修としている点に特徴がある。単なる語学留学ではなく、現地の学生と同じ正規授業を履修する正規専門科目留学をめざしている。学生は、早ければ1年次の11月に留学先の大学が求める英語技能試験のスコアの基準を満たす必要がある。そのため、1年次に週8～10コマの英語の授業を設け、集中的に学生の英語力を伸ばしている。

英語の授業は入学時に受検させるTOEICのスコアでレベル別にクラスを分け、15人以内の少人数クラスで実施する。学生は留学を希望する大学が設定したIELTS、TOEFL、TOEICなどのスコアに基づいて、9月に受検する試験の目標点を定めて学習に励む。

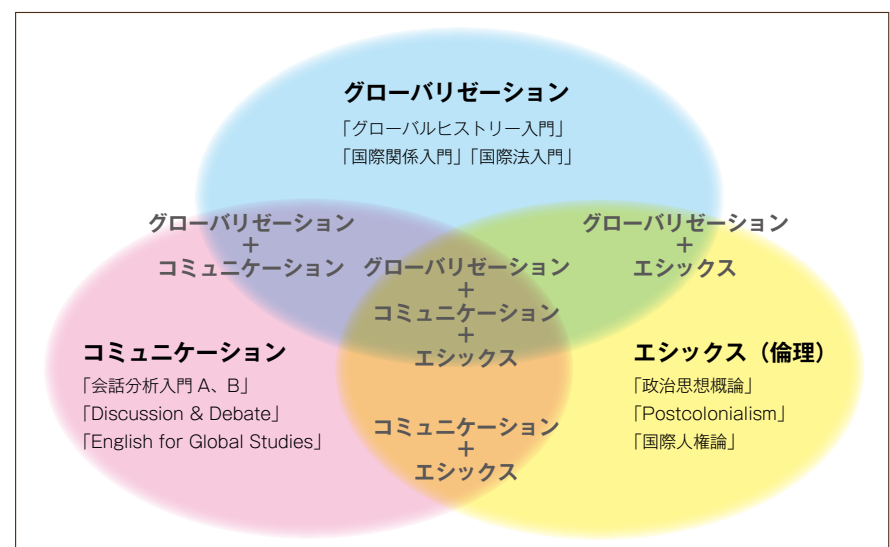
卒業時の英語力を担保するため、学科の卒業要件としてTOEIC730点などの基準を設けている。初年度は1年次の1月に15人の学生がこれをクリアした。全体では、2015年4月から2016年1月までに平均点が174点アップしている（図表1）。

留学後に学ぶ専門科目は「コミュニケーション」「グローバル化ゼーション」

【図表1】2015年度入学生 TOEIC平均スコアの推移（グローバルスタディーズ学科）



【図表2】専門科目（2年次以降）の学問領域構成図



「エシックス (倫理)」の3領域で構成されている（図表2）。学生は各領域を1科目以上履修し、学年が進行するに従って、複合領域の科目を学ぶことになる。

「エシックス」の領域は、浄土真宗の精神を建学の精神に掲げる本学ならではの特色だ。唯一の倫理観を絶対視するのではなく、グローバルな場面で柔軟に判断できる力を養ってほしいと考えるからだ。

学生が「英語を」学ぶのは原則、留学前までで、留学中および留学後は原則として「英語で」ほとんどの授業を学ぶことになる。専任教員の64%は海

外の大学でPh.D.を取得しており、専門科目を英語で教えることには問題はない。国際学会等で研究発表している教員がロールモデルとして身近に数多くいることが、学生によい刺激を与えている。

学生選抜

入学時の英語力よりも 学びへの高い意欲を重視

学部独自の公募推薦入試（英語型）において、英語外部検定を活用している。ただし入学時の英語力が低い場合でも、入学後の学習で留学可能な

レベルに到達可能と考えており、英語力よりも本学科で学ぶ意欲の高い生徒に入学してもらいたい。

留学支援

学費は大学が負担 成績優秀者には奨学金も

学科独自の提携留学先は、カリフォルニア大学バークレー校をはじめ北米やオセアニアに8大学ある(図表3)。提携大学は「教育内容が本学科の教育方針に合致していること」「留学生が多く在籍していること」を考慮して選んでいる。今後、さらに増やす予定だ。

留学先大学の学費は本学が負担する。成績優秀者には寮費相当額を支給する奨学金制度も設けている。さらに本学が学生交換協定を結んでいる71大学へのチャレンジも可能だ。

その他の学生支援

ハードな学習を支援する サポート体制を整備

英語学習は、1年次の必修科目「リサーチ方法論」の担任が各クラスのスーパーバイザーとしてサポートにあたる。小規模の学科なので、学生それぞれの英語力のレベルを把握しやすく、綿密なアドバイスができる。しかし、夏休み明け頃から成績が伸び悩み、ドロップアウトしそうな学生も出始める。これを防ぐために教員が2週間に1度集まって、学生の情報を共有してフォローにあたっている。

施設面でも支援体制を整備した。本学は深草キャンパスを多文化共生キャンパスと位置付け、移転に合わせて竣工した「和顔館」に、留学を支援するグローバル教育推進センター、自主学

習を支援するラーニングコモンズを設置した。留学生と交流するグローバルラウンジ、ネイティブスピーカーと会話できるマルチリンガルスタジオ、スピーキング専用ブースなどもあり、多くの学生が遅い時間まで活用している。

期待するキャリア

企業への就職だけでなく 海外の大学院進学も

グローバルスタディーズ学科の卒業後の進路としては、一般企業の国際関係部門のほか、国際機関職員、NGO、国内外の大学院進学などを想定している。入学後早い段階から自身のキャリアについて意識させるべく、初年次に1泊2日のキャリア合宿を開催し、海外で活躍するOB・OGから多くの刺激を受けられるようにしている。さらに「インターンシップ・アブロード」では、海外の民間企業などでのインターンシップが可能だ。また、「Career English」

【図表3】学科の提携留学先

	※2016年2月現在
●アメリカ	<ul style="list-style-type: none"> ・カリフォルニア大学バークレー校 ・カリフォルニア州立大学フラトン校 ・南ミズーリ州立大学
●カナダ	<ul style="list-style-type: none"> ・レイクヘッド大学 ・ランガラクレッジ
●オーストラリア	<ul style="list-style-type: none"> ・ディーキン大学 ・モナッシュ大学
●ニュージーランド	<ul style="list-style-type: none"> ・ワイカト大学

ではビジネス英語のトレーニングや履歴書の作成も指導する。

本学科は構想段階から「単に就職に有利だからとか、英語ができるだけでなく、海外の大学院に進学するような人材を育てる」という考えがあった。留学経験を含むハードな学生生活を通じて、海外の大学院に進学する学生が出ることを期待している。

Column

TOEIC330点が半年で840点に

Mさんは入学当初TOEIC330点。留学先が求めるスコアにはほど遠かったが、そこから一念発起。頻繁に専任教員に相談し日々の学習を積み重ねた結果、6か月後には840点まで上昇。2016年前期には、カリフォルニア大学バークレー校(UCバークレー)への留学が決定している。

UCバークレーは、2015年世界大学学術ランキングで第4位に入る名門校。現地の学生とともに机を並べて“Global Environmental Politics”“Political Philosophy”といった正規科目を受講する。

「今後の目標は、英語力の向上だけでなく、学識を深めていきたい。英語は『言葉』なので、話す中身は自分で考えることが必要です。アカデミックな内容を英語でこなす『本当の力』を身に付けて、UCバークレーでも一目置かれる存在をめざします」(Mさん)。

こうした経験を通じて、英語力や幅広い知識の修得と併せて、グローバル化に対応したタフネスを身に付けていく。自分に限界を設けず、常に上をめざして学び続ける力を持つ若者を社会に多く送り出したいと話す。